

龍膽寺

工业学院图书馆
藏书章

龍膽寺雄全集 第八卷

昭和六十年十月二十日 印刷
昭和六十年十月二十五日 発行

著者 龍膽寺雄りゅうたんじゆう

神奈川県大和市中央林間二一四一五

発行者 龍膽寺雄 全集刊行会

河野 進

発売所 株式会社 昭和書院

東京都新宿区神楽坂二一九

銀鈴会館二〇七号 一六〇

電話 〇三二六〇九三五四

振替 東京七一八二二七二

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価 二、八〇〇円

©1985 Y. RYUTANJI

ISBN 4-915122-53-4

目
次

創作小説 (昭和初期編)	
掌 <small>てのひら</small> の上の悪魔……………	7
類子の十六歳の記録……………	76
家を建てる……………	117
蟹に手を切られた話……………	133
創作小説 (戦前戦中戦後編)	
逝くものかくの如し……………	151
創作小説 (最近編未発表新作)	
待宵草の咲く丘……………	205

エッセイ	人間の能力の限界	245
随筆	奇習奇俗	261
詩編	(歌謡曲歌詩) 昨日の手紙 他	266
初出		273
解説		274

創作小説

昭和初期編

掌てのひらの上の悪魔

第一編

「では、そこらで一丈切つとこう。」

そういって、岩瀬伸助氏が葉巻の頭を灰皿の縁ほとで崩したので、瑤子ようこはタイプライターの鍵あしの上に指を止めて、すぐに椅子から立った。カーテンに蔭かげった部屋の隅の自分の事務机の上に、さっきから電話のベルが続いていたのだ。——斜かたに窮屈きうくつに二人の椅子が向き合っていたので、彼女は床ゆかに立つ時膝頭ひざかぶを軽く岩瀬氏のへぶつつけ

た。彼女は御免なさいと会釈をする代りに何かなし彼と眼を見合わせて、なけば媚びるように甘えた微笑を鼻から洩もらした。

「ええ、そうでございます。」

受話器を耳へあてて改まった返事をしてから、瑤子ようこはすぐに自分でも言葉を寛ひろげた。相手が誰だかすぐにわかったから。

電話は寫たからだった。

銀座へ来ている、婦りにどこかで落合おちあわなにか。——
そういう打合うちあわせだった。

「そうね。」

瑤子は事務机へ顔をこごめたまま睫毛をあげて、窓硝子を滑った黄昏近い弱い陽射しを見た。

「……廻ってもいいわ。どこからあんた今かけてるの？」

——黒百合から。

受話器の中の声があった。

「じゃ、そこで待っててよ、ね。……でも、少し遅れるかもわからないわよ。一寸まだ仕事残ってるの。ええ。

……嘘、そんなでもないけど。もう三十分ぐらい。」

——岩瀬氏のところへ戻ると、瑤子はからだを斜にして、彼の膝頭と椅子との間へ這入った。葉巻の煙が柔らかく空間に渦巻いて彼女の顔を包んだので、彼女は軽くかたかたの睫毛をしかめ、甘えるように唇のはしを唇で吊らしてみせた。ちよいとしたこんな表情でも、自分の顔立をどんなに魅惑深く美しく引締めるかを、ちゃんと心の底で意識しながら。と、——岩瀬氏の皺んだ大きな掌が、ギョッと彼女の繊い指を握り締めた。

「瑤子さん。」

煙の中から柔らかく岩瀬氏はいった。

「ママに内緒で帰りにどこかへ寄りみちなどをしてはいかんよ。わしが疑われでもしてはかなわんから。四時にわしはちゃんちゃんと帰しとる筈なのに、あんたは何じやいうではないか、毎晩九時になったり十時になったりする。……今の電話は一体誰からじゃ？」

「お、と、も、だ、ち。」

瑤子は指を弄られながら答えた。

「お友だち？……男のお友だちか女のお友だちか？」

「を、と、こ。」

いい終らないうちに、いきなり岩瀬氏は相手の指を強く握り締めた自分の拳で、透明な靴下の上から彼女の膝頭を叩いた。

「いかんいかん！……よし。そんならママにそう密告してやる。」

彼女は顔一杯に朦々と吹付けられた煙の中で危なくむせながら、眉の間に皺が寄るくらいに固く睫毛を閉じて、捲毛のない素直な断髪をきっぱりと横に揺さぶるのだった。

「あたしも、じゃ密告するから。……」

「何を？」

「あれを。……」

「あれ？」

「先統けて、早くおしまいにしてよ。ね。内緒にしてあげてあげるから。それに、またいつかのチョコレートを持って来てあげるわ。……あら、どこまでだったかしら。」

そういつて、彼女は相手の手の中からさりげなく指を奪って、しかけた仕事へ淡泊に向き直るのだった。こんな冗談をし合ったりふざけたりする相手ではないことを、不意に思い出したかのように。と、——年寄じみて皺んだ岩瀬氏の眸差を、何かわびしい灰色の翳りが掠めるのだった。

支配人の松田氏がさつき折鞘をかかえて出て行つてからは、ホテルの岩瀬氏のこの秘書室は、頭の毛の薄れた主人公と稚い可愛いらしいこの女秘書ときりで、ひっそりしていた。一杯にカーテンを払った二重の窓硝子が、高層な建築群の空輪廓へまさに落ちかけた一月の陽に赫々と輝いて、大会の黄昏が奏するもろもろの騒音をしかと喰止めているので、緑色の壁に囲まれた広からぬ部屋には、和んだ明るみと睡気を催すほどの静けさとが湛えられ、燠炉の石灰骨を舐る蒼いガスの焰の、絶間ない

小さなお喋りだけが耳にきわだつたのだった。

「ね、続けて下さらない？」

瑠子の桃色の織い指はタイプライターの鍵の上で、踊り娘の様に跳ねたがっていた。彼女はさつきから岩瀬氏の口述で、サイゴンの支店へ送る英字の電信文を書取つていたのだ。

「いかん。白状せんことには。」

「何を？」

「その男のお友だちを。」

「だって、……」

そういいかけて、だしぬけに彼女は岩瀬氏の大きな両の掌にしっかりと頬を抑えられ、紅の鮮やかな唇を厭応なく仰向けられるのだった。そうして、棘々しい彼の口髭が小さな針のようにチクチクと彼女の口端へ押付かった時、彼女の耳へ呷れた男の声が温かい息と一緒に囁かれるのだった。

「うちへ帰ったら、ママにそう告口をするんじや。ホテルへ行くとおじさまは仕事をさせずに、こんなことばかりしとるんじやと、な？……は、は、は、は！」

瑠子が丸の内のホテルの岩瀬氏の秘書室にこんな風に

して通うようになったのは、つい十日ほど前からで、しかも、岩瀬氏からじかに指図を受けてこんな仕事をするのは、彼女は今日がはじめてだった。彼等がそれでいてこんなに気安いのには、そもそも彼等の関係の源にこれから述べるような事情があったからだ。

岩瀬氏は瑤子の死んだ父親と嘗て共同で、台湾に樟脳しょうのう会社を経営していたことがあった。事業界での地盤も、資本も経験もない若い同志で、ひどく二人とも乗気まうきになつて骨を折つたものだったが、事業そのものはみじめな失敗に終わった。

現在岩瀬氏は、関西の景勝地をめぐる瀟酒しょうしゆな電気軌道や、小さな造船ドックや、コンクリート工場や、二三の外国貿易や、そういつた事業を幾つか支配して、関西の企業界では一寸重きをなした地位にいるが、それでも、昔のあの赤裸あかはだかの苦闘時代を回想するたんびに、むしろその時分の方が自分にとっては人生の華はなだつたと述懐したりするくらいで、瑤子の死んだ父親との友情についても、数々の快い記憶を彼は持っているのだった。

瑤子の父親の死んだのは、ヨーロッパ戦争のあの企業界の好況期の前で、岩瀬氏の口調を借りれば、——この

素晴らしい御馳走のお膳立てを前に、その匂いを嗅いだだけで、彼は彼の事業にもそうして、おお！ 人生にもさよならをしてしまったわけだった。

瑤子の死んだ父——蘭氏は、樟脳事業の失敗の後、暫くサンフランシスコに銀行勤めをしていたので、瑤子は異国のこの繁華な港町を生まれ故郷に持つたのだった。

一家が日本へ戻つたのは彼女が二つの年で、要するに蘭氏の性格の底に根強く脈打っている冒険心が、また昔の事業熱を煽つたからで、その頃東京の財界に少しづつ羽振りを振りかけた岩瀬氏を頼つて、一二の事業をもくろんでみたのだったが、いずれも失敗に終わってしまった。

夫の死後、蘭夫人は巨額の負債を背負つたまま、忘れがたみの一人娘を伴なつて横浜へ移り、外人の商會に勤めたり、語学や音楽の個人教授をしたり、外人相手の小さな雜貨商を営んだりしていたが、震災後数年して、ヨーロッパの社交舞踏が東京の市民の生活に流行的に浸潤して行く気運を見抜くと、だしぬけに横浜の生活を畳んで、東京へ出て来た。そうして、死んだ夫との古い友情関係を頼つて岩瀬氏を訪ね、潤澤な彼の物質的後援の

とに、京橋の彼の支社、——岩瀬ビルディングの五階の大広間に、華々しく社交舞踏場を開いて、十三になったばかりの瑤子を相手に健気に新しい生活の渦へ飛込んだのだった。

因循姑息な道德の殻をかむった日本の社会から、数々の非難と迫害とを受けながら、ともかく彼女の仕事は岩瀬氏の庇護のもとに、着々と根を張って行った。事業界の辣腕家として識られたこの保護者と蘭夫人——外国婦りの美しいこの未亡人との間に情事関係が臆測されたりして、やかましい噂の種を世間に投げたのも、その頃だった。こうした生活の雰囲気にとりまかれ、瑤子の少女時代は過ごされた。

「あなたはどうかママのいい片腕になりそうじゃね。」
事業の根拠がいつとなく関西に移されて、そっちへ居をかまえた岩瀬氏は商用で上京するたびに、蘭夫人を舞踏場に訪ねては、眼に見えて乙女らしく姿をととのえて行く一人娘の瑤子を愛着深い眼で眺め、そうしてつぶやくのだった。

「それとも、ママのこんな商売は厭かな？」
「厭なのでございますって。……」

蘭夫人は明るく娘を顧みるのだった。

「……この頃では舞踏場へ出ますと、肝腎のあたたくしよりも、若いかたがたの間には人氣があるのでございますけれど、当人はなぜか厭だと申しますの。……」

「ほう。では女学校を出たら何になるな？」

「あたし？」

瑤子は人怖じもなく母の保護者を見上げて、そうして顎頰を傾けるのだった。

「あたし、そうね、映画女優はいけない？」

「映画の女優？」

「でなきや、タイピスト！」

ホ、ホ、ホ！と蘭夫人は笑うのだった。

「……じゃ、おじさまの秘書になって、どっさりおじさまからお給料を載くといいわ。タイプライターを習ってね。いかがおじさま。」

「大いに賛成じゃね。」

母に似た美しい娘を見やりながら、岩瀬氏は何かしら将来を楽しむように、眼を細めるのだった。

「では一つ、そのつもりでわしも用意をしとこう。将来はそうして、亡ったババの後継ぎになるかな？は、は、」

は。」

——この冗談が、しかし具体化したのだ。

最近舞踏場へ出入りする若い青年たちの間に、瑤子を挟んである感情関係の葛藤が起きて、それが表沙汰になり、舞踏場の経営に好ましくならぬ影響を与えるようになったので、それを機会に彼女はママの仕事と全く離れて、寛大なママの保護者——岩瀬氏の懐へ跳び込んだのだ。

「するとわりに、瑤子さんについての一切の責任をまかせてくれるんじゃないかね。」

舞踏場に三回目の巨額な出資を約束した夜、伊豆のある温泉ホテルの一室に落ち合つて、岩瀬氏は何か意味あつた眼を、蘭夫人の顔につけるのだった。

「あたしからお願ひ致しますわ。」

夫人は酔つた眼に恍惚と媚を湛えて、うなづくのだった。

「……どのみち女親一人で、他に頼りはないのですから、あなたに将来をおまかせするはかごございませんの。どうぞよろしく。」

——瑤子の発音が軽やかな舞踏の歩調で、丸の内のホ

テルの岩瀬氏の秘書室へ出入りをするようになったのは、それから数日してだった。

四時。——

仕事がつむと、瑤子は簡単に自分の机の上の整理をして、それから化粧室の鏡の前に立った。眼の周りに軽い疲労が沈んでいたが、唇は嬰粟の花弁のように紅に燃えていた。

京橋の支社のあの騒々しい社長室とは違って、ホテルの秘書室にはめつたに客の顔も見えないので、忙しい主人公の身辺などとは思ひもよらず、ひどくこちらはまたいつものんびりと閑散だ。支配人の松田氏が一人寢泊まりして部屋の管理をしているきりなので、岩瀬氏が大阪の本社に詰めている時などは、瑤子は髪の真っ白い無口なこの老人と、午後も午後も二人きりで、どうかすると一日仕事らしい仕事がないことさえある。

昨夜岩瀬氏が突然上京してホテルに投宿したので、今日は珍しく秘書室は人の気配に生き生きとして、瑤子も朝から電話の取りつきや書信の整理などで、化粧崩れを直す暇もなく忙しかつた。

「冗談はともかく、」

自分の事務机の上をざっと整理してから便所へ立って行った岩瀬氏は、瀬戸の手洗へ龍頭から水を奔らせながら、鏡の中の瑤子の顔を覗いていうのだった。

「あまり遅くまで寄りみちなんで帰らんけりゃいかんよ。」

「ええ。」

瑤子は頬のまわりに明るく紅を叩きながら、艶めかしく笑った。

「女の子の夜歩きなぞ、どう見ても褒められんからの。」

「なアぞ？」

鏡の中の彼女の顔が甘えるように彼を見た。

「なぞって、わしのような不良少年が澤山網を張つとるからの、夜の街には。」

そういって、はっはっは！ と腹から笑うと、岩瀬氏は手巾で無雑作に手を拭きながら鏡の前へ寄って、彼女の華奢な頸すじの辺へ後ろから顔を寄せ、毛並みの素直な彼女の断髪へ、ひいやりと頬をつけるのだった。

二人の顔が鏡の中に並んだ時、彼は小さくいった。「わしの眼を真ッ直に見て御覽。」

年齢には早熟な怪しい情熱を秘めた彼女の瞳が、鏡の中で彼を見つめ、すぐにそれは艶めかしい微笑の中に融けた。

「厭……」

「これは何じゃ？」

逞しい岩瀬氏の腕が腋の下から彼女の胸へ廻って膨れたお乳の上を抑えた。

「お乳。」

彼女は鼻から秘密っぽく笑いを洩らし、彼の腕の中で身をねじった。

「探りたい！……」

は、は、は！ と岩瀬氏は笑った。軽く彼女を後ろから抱いたまま、白粉気の濃い彼女の頸すじへ口髭を押し付け、そうして、さっさとそのまま化粧室を出て行ってしまった。

彼自身の忙しい時間を思い出したという風に。

——彼女は鏡の前にじっとしていた。彼女は頭の毛の薄れた好色な主人公が、自分に以前からどんな考えを持っているかも、そうしてそれに応じて、彼を係蹄へ落とし込むには、どんな技巧をもつたらいいかも、伶俐

にわきまえていた。この淫蕩な中老の男は、早熟なこの娘にとっては、今や少からぬ好奇の的^めでさえあった。

ママは時折蔭で彼女に囁くのだ。

「うまくおぢさまをつかまえちゃうのよ。それが結局あなたの幸福よ。」

が、そのくらいのことには百も承知な瑤子だった！

遠くでドアの閉まる音がした。窓の外に聳えたビルディングの窓には、ところどころに黄ばんだ灯りがともり、明るい宵闇の中に時折電車の火花が蒼く閃く^{ひらめ}のだった。

ほんのまだ宵の口なのに、銀座の明るい燈路は何か人影も乏しく、お正月の夜らしい寂れかた。——

瑤子はオーバーの毛皮の襟へ柔らかく頬を埋めて、昼間まき散らした広告ビラの上を、華奢な靴の踵で軽やかに踏んで歩いた。

ネオンサインが KUROYURI と緑色に文字を浮かした大理石のアーチをくぐって、椅子ばかり混雑した酒場の一隅に彼女が立つと、片側の仄暗いボックスから短いマントを羽織った十八九の少年が一人立上りがって、形の

いいい、栗頭から毛深いハンチングをとった。——穹^{たかし}だった。

「ずいぶん待っちゃった！」

少年は病身らしい乳色の華奢な頬に幾らか生き生きと血色をのぼして、温かくなつっこく彼女を迎えた。

「きっかり一時間待ったよ。」

「御免なさい。」

瑤子は卓子の前に立つて、皮の手袋を穹の肩へ載せ、何かしら思い深い眼で真近く少年の顔を見た。

「……今日社長が見えたもんだから。」

「社長？……あ、岩瀬さん？」

「マント着てらっしゃいよ。寒いわ。……でもいいの？こんな遅くまで遊んで。また熱が出やしない？……母さんにそういつて家を出たの？」

「僕、ね。」

と、少年は神経質に口早にいった。

「今晚瑤子さんと邦楽座へ行く約束をしたからって、そういつて家を出て来た。おまけにそうしたら、母さんにお小遣いまで貰っちゃってさ。五円……」

五円が如何にも意外そうだった。